

|                  |                                                                                                                                                                                                                   |
|------------------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| Title            | リチャード・ウェイトリーの「交換の学」とその思想的背景：<br>近代経済学における交換理論のミクロ的視点の萌芽                                                                                                                                                           |
| Sub Title        | Richard Whately's "Catalactics" and the background of his thought : a beginning of<br>methodological individualism in English economic thought                                                                    |
| Author           | 中野, 聡子                                                                                                                                                                                                            |
| Publisher        | 慶應義塾経済学会                                                                                                                                                                                                          |
| Publication year | 1989                                                                                                                                                                                                              |
| Jtitle           | 三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.82, No.1 (1989. 4) ,p.137- 163                                                                                                                                            |
| JaLC DOI         | 10.14991/001.19890401-0137                                                                                                                                                                                        |
| Abstract         |                                                                                                                                                                                                                   |
| Notes            | 論説                                                                                                                                                                                                                |
| Genre            | Journal Article                                                                                                                                                                                                   |
| URL              | <a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19890401-0137">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19890401-0137</a> |

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

## リチャード・ウェイトリーの

### 「交換の学」とその思想的背景

——近代経済学における交換理論のミクロ的視点の萌芽——

中 野 聡 子

1. はじめに
2. ウェイトリーの交換の学とその位置づけ
  - (a) ウェイトリーの交換の学のミクロ的視点
  - (b) ウェイトリーの交換の学の位置づけ
3. ウェイトリーの交換の学の思想的背景
  - (a) 自然神学から演繹科学へ
  - (b) ペリーの神学的功利主義
  - (c) マンデヴィルの「私悪即公益」
4. おわりに

#### 1. はじめに

本稿で取り上げるリチャード・ウェイトリーは、イギリスの経済学史上アダム・スミスと W.S. ジェヴォンズの間の時期に登場した人物である。ウェイトリーは、1787年イギリスのブリストルで生まれた。オックスフォードのオリエル・カレッジで古典、神学を学び、1829年には、W.N. シーニョアに続いてオックスフォードにおける経済学ドラモンド講座の担当者となった。1832年には、アイルランドのダブリンのトリニティ・カレッジに経済学講座を開設し、自ら初代の担当者とな<sup>(1)</sup>っている。

ウェイトリーの周囲には、当時のリカード経済学と性質を異にする効用論的な接近をする経済学者達が輩出している。たとえば、ドラモンド講座のウェイトリーの前任者である W.N. シーニョア

---

注（1） 本稿で用いるウェイトリーに関する主なテキストは、以下の通り。

Richard Whately, *Introductory Lectures on Political Economy*, 1st ed. 1831. 2nd ed. 1832 London, B. Fellowes, Reprinted 1966 Augustus M. Kelly.

Richard Whately, *Elements of Logic* comprising the substance of the article in The Encyclopaedia Metropolitana: 4 ed. revised London; printed for B. Fellowes Ludgate Street 1831.

Richard Whately, *Easy Lessons on Money Matters*; For the Use of Young People, London, John W. Parker, West strand, 1833.

*Paley's Moral Philosophy With Annotation by Richard Whately D.D.*, London John W. Parker and Son West Strand 1859.

E. Jane Whately, *Life and Correspondence of Richard Whately D.D.*, 2 vols London 1866.

これ以外の、著作は60以上にのぼる。著作表については、*Life and Correspondence of Richard Whately D.D.* の第二巻の巻末を参照のこと。

がいる。彼は、1812年にオックスフォードの神学のテストに失敗し、その時3つ歳上のウェイトリーがテューターとして紹介された。それ以来、二人は友人となっている。また、ドラモンド講座のウェイトリーの後任は、W. F. ロイドであった。そしてダブリンのトリニティ・カレッジの後任としては、M. ロングフィールド、I. バット、J. A. ローソン、W. N. ハンコック、R. H. ウォルシュ、J. E. ケアンズという人達が続く。<sup>(3)</sup>

これらウェイトリー、ロイド、ロングフィールドらの存在は、E. セリグマンによって1903年に、「忘れられたイギリス経済学者達」という論文の中で明らかにされた。<sup>(4)</sup> シーニョアについては、M. ボーレイの研究が、ロングフィールド、バットなどについては、L. S. モスの研究がある。<sup>(5)</sup> また、トリニティ・カレッジの経済学者達が、主観的価値論を唱え、学派に近いものを形成していたことが、明らかにされている。<sup>(6)</sup>

これらの研究によって、限界革命以前に、ジェヴォンズやマーシャルの先駆となる理論が展開されていたこと、さらにその業績が突発的な個人の孤立的研究ではなく、ダブリンやオックスフォードを中心に展開されていたことが明らかにされた。そして、その先駆的研究が、ある程度スミスを中心とする古典派経済学との関連のなかで登場し、一方でジェヴォンズやマーシャルといった近代経済学へ連続的に変移してきたということが、次第にわかってきた。しかし、このようなイギリスにおける限界革命の前史をなす経済学者達についての詳細な研究と明確な位置づけは、まだなされていない。就中、ウェイトリーは、これらの経済学者達に多大な影響を与えた重要な人物であるが、彼に関しては、ほとんど研究されていない。<sup>(7)</sup>

そこで、本稿でウェイトリーを取り上げるのは、どのような変化が古典派経済学から限界革命以後の経済学に起こったかという問題関心に根ざしている。ウェイトリーが、マクロ的生産・分配問題を経済学の中核とするスミス＝リカードの「富の学」からミクロ的な「交換の学」へと経済分析の視点を転換することを主張した点に着目して、ウェイトリーがイギリスにおける限界革命に果

注(2) E. Jane Whately, [1866] pp.16-17.

(3) 森 茂也『イギリス価格論史』東京、同文館出版、1982、p. 303.

R. D. Black "Trinity College, Dublin, and the Theory of Value; 1832-1863" *Economica New Series*, VII August 1975. pp.140-148.

ケアンズまでの就任期間は、以下の通り。〈1〉 Mountifort Longfield (1832-1836) 〈2〉 Issac Butt (1836-1841) 〈3〉 James Anthony Lawson (1841-1846) 〈4〉 William Neilson Hancock (1846-1851) 〈5〉 Richard Hussey Walsh (1851-1856) 〈6〉 John Elliot Cairnes (1856-1861).

(4) Edwin Seligman "On Some Neglected British Economist" *Economic Journal*, VIII 1903. pp.335-363, pp.511-535, 邦訳『忘れられた経済学者達』未来社, s. 30.

(5) Marian Bowley, *Nassau Senior and Classical Economics*, London; George Allen and Unwin 1973.

Laurence S. Moss "Issac Butt and the Early Development of the Marginal Utility Theory of Imputation" *History of Political Economy*, V, Fall 1973. pp.317-318. Laurence S. Moss, *Mountifort Longfield; Ireland's First Professor of Political Economy*, Green Hill Publishers/Ottawa Illinois 1976.

(6) R. D. Black 前掲論文. J. G. Smith "Some Nineteenth-Century Irish Economists" *Economica New Series*, II, Feb. 1935, pp.20-32.

たした役割を検討してみたい。

さらに、ウェイトリーを取り上げる理由は、限界革命以後の純粹交換理論における経済主体というものが、どのような思想を源として、経済学史上登場してきたかということを考察するためである。ジェヴォンズが限界効用理論を展開するうえで、ベンサム<sup>(8)</sup>の功利計算を利用したことは、よく知られている。しかしながら、ベンサムがジェヴォンズに与えた影響は、効用計算という面に限られており、社会的な厚生基準を与える功利主義の思想内容そのものではない。それならば、個人の選択行為から交換現象を説明しようとするジェヴォンズの交換理論の問題視角は、どこに由来しているのであろう。そのとき、ジェヴォンズの問題視角の先駆として浮かび上がってくるのが、ウェイトリーである。しかも、ウェイトリーを考察することで、ウェイトリーの交換の学も、功利主義と軌を一にするものではなく、マンデヴィルの思想により近いものであることが、確かめられるのである。このように、ウェイトリーという人物を取り上げることによって、今までとらえられなかった思想的連関を見出すことができるのである。

より具体的に言えば、本稿の目標は、次の二点にある。第一に、ウェイトリーが、その著作『経済学講義序説』<sup>(9)</sup> (1831)において提唱した交換の学のミクロ的特性を明らかにすることである(2節)。第二に、ウェイトリーが、交換の学を提唱した思想的背景を考察すること、これである(3節)。第一の問題に関しては、(a)ウェイトリーが「限界主義」<sup>(10)</sup>として総称される経済分析の問題視角を有していることを説明し、(b)交換の学をスミスとジェヴォンズとの関連で位置づける。第二の問題に関しては、(a)ウェイトリーの方法論的認識基盤が、W.ペリーの自然神学とウェイトリー自身の論理学にあることを指摘するが、むしろここでの焦点は、ウェイトリーの交換の学におけるミクロ的特性が、どのような社会認識に由来しているかという問題を、道徳哲学と関係づけて考察すること

---

注(7) J. A. Schumpeter, *History of Economic Analysis*, Edited from Manuscript by Elizabeth Boody Schumpeter, Oxford University Press 1954, pp. 483-484. J. A. シュンペーター『経済分析の歴史』3巻、東畑精一訳、岩波書店、1980. pp. 1018-1019. 「次に、われわれはシーニョアと彼の指導者であったウェイトリーを見たい。われわれに対する後者の重要性は、大きいが補足しがたいものである。彼は深遠でもなく、また非常な学識を持っていたわけではなかった。彼は、独創的でなく明敏でもなかった。しかし、彼の明快にして強靱な知性は、通例見られないほど広範な関心のなかで、いやしくも捉えられたあらゆるものを、冷静に且つしっかりと把握していたのである。そしてその時代、祖国、世界において、彼は人間形成的なタイプのリーダーであったが、彼こそ要人という語が意味する理想的な例証であった。……経済学に対する彼の最も重要なサービスは、シーニョアを育成したことであって、後者の全てのアプローチは、ウェイトリーの影響を露呈しているのである。」

(8) ジェヴォンズと功利主義の関係については、ジェヴォンズ自身がベンサムおよびペリーの快楽主義に言及していることからわかる。W. S. Jevons, *The Theory of Political Economy*, 5 ed. Reprints of Economic Classics Augustus M. Kelly, New York 1965, p. 24, p. 28. ジェヴォンズとベンサムの関係については、次の論文がある。R. D. Collison Black "Jevons, Bentham and De Morgan" *Economica*, 1972, pp. 119-134. Ross M. Robertson "Jevons and his Precursors" *Economica*, vol. 19, July 1951, pp. 229-249.

(9) Richard Whately, *Introductory Lectures on Political Economy*, 1st ed. 1931, 2nd ed. 1832, London, B. Fellowes, Reprinted 1966 Augustus, M. Kelly.

(10) 次の節の注(19)を参照。

にある。そして、本稿では、ウェイトリーの社会認識が、(b)功利主義体系と軌を一にするものではなく、(c)マンデヴィルの『蜂の寓話』<sup>(12)</sup>にある「私悪即公益」という思想を母体としていることを示すことが意図されている。

本稿で、あえてウェイトリーという人物をとりあげるのは、このような考察を通じてイギリス経済学における市場のミクロ分析の形成過程を、学史的に明らかにし、思想史との接点を示すことができるのではなかろうかと考えるからである。

## 2. ウェイトリーの交換の学とその位置づけ

### (a) ウェイトリーの交換の学の見点的視点

ウェイトリーの『経済学講義序説』(1832年、第二版)は、前年に出された初版に第九講義が付加されている。全体の構成を概観すれば、まず第一講義において、経済学の名称を「交換の学」(Catallactics)とすることを提唱し、第二講義で経済学と宗教、道徳との関係を論じ、第三講義で経済学を演繹科学としてとらえることを主張し、第四講義で経済学と自然神学の関係を論じている。第五講義から第八講義において、文明社会の起源と社会進歩を分業、交換、競争の観点から述べている。第九講義で、再度経済学を演繹科学としてとらえることを主張し、経済学における定義の問題、曖昧な言葉の使用について述べ、その一例として、財の価値は労働によって決まるのではないという価値論に言及している。

ウェイトリーの労働価値論批判は、もともと、彼の『論理学綱要』<sup>(13)</sup>の付録に載せられたものである。しかも、そこでウェイトリーは、シーニョア<sup>(14)</sup>に負っていることを述べている。価値論は、ウェイトリー独自の議論というよりも、シーニョアとの関連で研究されるべきものである可能性が高いのである。ウェイトリーの独自性は、効用論を展開したことよりも、交換分析を経済学の主題としたことにある。

しかしながら、ウェイトリーは交換理論を分析的に展開しているわけではない。ウェイトリーが自認するように、彼は「詳細な経済学体系を提示するつもりはない」<sup>(15)</sup>のである。ウェイトリーの目

---

注 (11) William Paley, *Natural Theology, Moral and Political Philosophy; The Works of William Paley*, printed verbatim from original editions, London, T. Allman, 1841. ペイリーが、経済学のなかで言及されているものとしては、わずかに次のものがある。James Bonar Malthus and His Work led. 1885 2ed. 1924. p. 34. J. ボナア『マルサスと彼の業績』改造社出版 S. 5 このなかで、マルサスの道徳哲学上の思想を、ペイリーにもとめている。

(12) Bernard Mandeville, *The Fable of the Bees; Private Vices Public Benefits*, with a commentary critical, historical and explanatory by F. B. Kaye. Oxford Clarendon Press, 1924. マンデヴィルの研究は、スミスとの関係で論じられることが多い。田中敏弘『マンデヴィルの社会思想』有斐閣, S. 41.

(13) Richard Whately, *Elements of Logic*, comprising the substance of the article in The Encyclopaedia Metropolitana: 4 ed. revised London; printed for B. Fellowes Ludgate Street 1831.

(14) Richard Whately, *Elements of Logic*, [1831] p. iv ウェイトリーとシーニョアの関係は非常に重要であるが、別稿で扱いたい。

的は、経済現象を捉えるのに、「役立つような手続きの一般原理を示唆するよう努力すること」<sup>(16)</sup>であった。そこで、彼の提示する経済現象を把握する様式は、いかにして市場のミクロ分析を強調する方法につながるものであるかということを、『経済学講義序説』を再構成しながら説明することしよう。

ウェイトリーは、次のように言って「交換の学」という名称を提唱する。

「アダム・スミスは、実際、彼の著作を『諸国民の富』についての論説と呼んだ。しかし、これは学問それ自体に対してではなく、取り扱う対象となるものに対してのみ名前を与えているにすぎない。最もよい記述として私が好むのは、カタラクティクス (Catallactics)<sup>(17)</sup>あるいは、『交換の学』である。」

ウェイトリーは、脚注において、カタラクティクスという語を「交換の学」という意味で用いる古典的典拠はないと言っているので独自の用法であることがわかる。<sup>(18)</sup>ウェイトリーが、あえて「交換の学」として経済学をとらえようとするのは、スミスの「富の学」の延長上にありながらも、経済現象を把握するうえでの観点の差異を強調しようとするからである。

経済学説は、しばしば効用価値説と労働価値説とを基準として区分されてきた。しかし効用理論そのものの存在は古くから有るもので、唯一効用理論のみをもって限界革命を特徴づけることは難しい。そこで、極大化行動の分析、微分概念の使用、あるいは一般均衡の体系の成立という要因が重視されている。ところで、これらの要因を経済現象に対する接近の為の問題視角という側面から捉えると、「交換現象を交換主体の主観的な選択行動に基づいて論理化する」問題視角として総称することができよう。L. ワルラス、C. メンガー、W. S. ジェヴォンズの共通点を、この点に求めることも可能である。ワルラスは稀少性概念に立脚し、主体の効用極大化条件から需要関数を導くことによって、経済全体の相互依存のメカニズムのなかに主観的な個人行動を基礎づけることができた。メンガーは、「欲望」を出発点として経済現象を説明した。そして、ジェヴォンズは、ベンサム功利主義の快樂計算を利用して、市場におけるペアワイズな交換の均衡を見出した。いずれにおいても、交換現象は交換主体の選択的行動から論理的に説明されているのである。そして、ウェイトリーが「交換の学」と呼んで推奨するものは、まさにこの問題視角であると思われる。ただしウェイトリー自身は、交換理論そのものを展開していない。むしろ、「交換の学」に効用理論が結びつき、数学的な限界概念によって問題が定式化され、はじめて限界効用理論を伴う交換理論が展開されるのである。ウェイトリーの段階においてはまだ、問題視角が提示されているだけなのである。

---

注 (15) Richard Whately, *Introductory Lectures on Political Economy*, 2nd ed. 1832 London, B. Fellowes, Reprinted 1966 Augustus M. Kelly. 以下, Whately, "ILOPE" と略す。p. 221.

(16) Whately, "ILOPE" p. 221.

(17) Whately, "ILOPE" p. 6.

(18) Whately, "ILOPE" p. 6.

それでは、ウェイトリーが「交換の学」として提唱する問題視角はどのような特徴を持っているだろうか。ウェイトリーが述べる断片的な主張をつなぎあわせて、「交換の学」という観点に照らしてみると、富田重夫によって区別されている「限界主義の経済学」の方法と構成が現れている。富田は、J. S. ミル、J. E. ケアンズ、J. N. ケインズらに代表されるイギリス正統派経済学とC. メンガー、M. ウェーバー、L. ロビンズらの大陸の限界主義経済学を対比させている。後者の特徴は、ロビンズの『経済学の本質と意義』にも見られるように、第一に経済法則について精密法則を求めようとする<sup>(19)</sup>こと、第二に財の定義について稀少性定義の立場をとること、そして第三に方法論的個人主義の考え方にたつことである。これらの三要因は、いわば限界革命以来現在にいたる交換理論のミクロ分析の視点と枠組みを総合的に捉えたものであると解釈できよう。そして、まさにウェイトリーの「交換の学」の中に、これらの三要因が現れている。

ミクロ分析の視点を内包するウェイトリーの経済認識は、具体的には次のような特性を有する。

- (1) 用語の厳密な定義に基づく演繹体系の樹立をめざし、特に財と主体との相互連関について演繹法則を導き出そうとする。
- (2) 交換における財の移転は、主体の意志決定にのみ依存すると考えられ、交換法則を財の内在的性質に求めない。そこで、財の評価を主体の主観的評価に求めようとする。
- (3) 経済主体の行動の特性を、人間行動の他の諸側面から切り離し、抽象化し、主体行動を交換における意志決定として限定的に把握する。そのような主体行動に基づく説明原理をもとめるという意味で、方法論的個人主義の立場をとる。

以下、この三つの特性を順次検討していこう。

(1) 演繹的方法について。ウェイトリーによると、経済理論は、経験の積み重ねによってのみ構築されるものではないと考えられている。ウェイトリーは、「何が富を構成し、その分配を規定する基本法則が何であるかを考察せずに、救貧法や不在地主制度などについて議論する人があるが、これは、ユークリッドの定義を知らずに幾何学の研究をするようなものである<sup>(20)</sup>」と言って、体系的経済学の研究の必要性を説く。その際ウェイトリーは、経済学は事実に基礎を持つと考えているが、事実を集め、そこから一般原理を引き出す方法に反対する。ウェイトリーは、一般に科学としての学問研究につぎの二点を要求する。一つは、推論の根拠となるデータの正確な確定、もう一つは、そのデータから結論を導く過程の正確さである。そして、この二点のうちどちらに重きがあるかは学問によって異なり、経済学はむしろ誰でも知っているわずかの事実から演繹を行うことが必要で

---

注(19) 富田重夫『経済学方法論』日本評論社1962年、pp. 17-98。富田は必ずしもジェヴォンズを「限界主義経済学」の中に分類していない。しかし、ジェヴォンズの交換理論に限って見るならば、限界主義の中に分類することも可能であると思われる。そして、イギリスにおける限界主義のヴィジョンが、ウェイトリーをもって始まっていることを、以下論証するつもりである。L. Robbins, *An Essay on the Nature and Significance of Economics*, 1 ed. 1932, 2 ed. 1935, pp. 16-23 Macmillann and Co., LTD. London. 『経済学の本質と意義』中山伊知郎監修、辻六兵衛訳、s. 32, 東洋経済新報社、pp. 26-36.

(20) Whately, "ILOPE" p. 223.

ある<sup>(21)</sup>。家の建て方は知っているが、少ない材料しかない者は、材料が集まるまで小さい家を建てればよいが、多くの材料を持っていたり、家の建て方を知らない者は、山積みにならざるを得ないという比喩を用いて、経済学における‘Physical Investigation’ではなく、‘Logical Investigation’<sup>(22)</sup>の必要性を主張する。そして、命名法の必要つまり、経済学で用いる用語の厳密な定義を<sup>(23)</sup>要求する。

このように経験法則ではなく、演繹法則を探究しようとするためには、経済理論は一定の抽象的な経済構造を想定したうえで展開されねばならない。なぜなら、推論は常識を拠所としてなされるのではなく、一定の定義を持った用語をもとにしてなされるからである。事実、ウェイトリーは、<sup>(24)</sup>常識にのみ頼ることを、強く諫めているのである。

それでは、どのような経済構造が、想定されているのであろうか。それは、財と主体との相互連関の構造であろう。ウェイトリーは、次のような叙述のなかで、主体行動と財の需給の間に相互作用が存在し、その作用が価格決定に影響を与えているということを把握している。

「どのような容易さと規則性でこの重要な目的（財市場のある都市で、財が首尾よく必要な所へ供給されること。〔筆者〕）が、多くの卸売業、特に小売業の人たちに作用する私的利益からでは明敏さと用心を通じて、年々あるいは日々達成されるかを考察することは、本当にすばらしい。これらの各人は、自分が商っている財に対する、周囲の者あるいは彼がよく行く市場の需要を見る。彼があまりに多くストックし過ぎることによって、あるいは、彼のライバルが彼より安い価格で売ることによって、彼が得るかもしれない利益をすべては実現できないと把握すること、また彼の手元に財が残されるかもしれないということを把握すること——これらが、対立する筋肉のように働いて、彼の取引と彼が売り買いする価格を規制するのである。<sup>(25)</sup>」

ウェイトリーは、各経済主体が私的利益をもとめることから発する判断と取引量、売買価格のあいだに相互作用が存在し、それらに対立する力となってある一定の値に取引量と価格を規定しているということを、把握している。つまり取引のメカニズムというものを、各主体の判断からとらえているのである。ウェイトリーの「交換の学」は、このような視点から、財と主体との相互連関についての演繹法則を導きだそうとするものである。

(2)交換法則の主観的性格。ウェイトリーは、富の学ではなく交換の学として経済学をとらえなくてはならない理由を、次のようにいっている。

---

注 (21) Whately, “ILOPE” pp. 225-226.

(22) Whately, “ILOPE” p. 226.

(23) Whately, “ILOPE” pp. 239-247.

(24) Whately, “ILOPE” pp. 62-64.

(25) Whately, “ILOPE” pp. 97-98.



「経済学が取り扱うものそれ自体は、もし我々が、それらを交換の対象とする可能性ある  
いは意図を取り去ってしまうなら、経済学の扱う領域からただちに排除されてしまうか  
(26)  
らである。」

「富という語を、交換可能な物に限定することは、同じものが、ある人にとっては富であり、別の人にとっては、富でないということがおこるので、反対されてきた。まさに、このような状況こそ、私が、交換の学という言葉を用いることを推奨する理由である。おなじものも、別の人にとっては異なったものである。<sup>(27)</sup>」

ウェイトリーは、何が経済財であるかということを、財それ自体に内在する性質によってではなく、財を交換主体の意図に関係づけて捉えようとしている。物理的に同一なものが、個々の人によって異なった評価を受けるということに、ウェイトリーは注目しているのである。この場合ウェイトリーは、財のある種の物質的性質にもとづいて、財を定義するのではなく、経済主体の意志決定に財を従属させて、財を把握している。したがって富というものを、主体の判断に先立って、分析者があらかじめ想定することに反対なのである。

さらに、ウェイトリーは『やさしい貨幣問題講義』<sup>(28)</sup>のなかで、財の価値は、財の稀少性とその財の望ましさに依存するものとし、財に投下された労働量が、財の価値を決定するのではないと述べている。

「水は、人々が喜んで買い求めようとするところでは、神の恵みによって豊富にあるこの地より有用というわけではない。水に価値を与えるものは、その稀少性である。<sup>(29)</sup>」

「しかしながら、もしどの人も、あるものを所有することを欲する理由がないなら、稀少性だけが、ものを価値あるものにするのではないであろう。稀少ではあるが、何の価値もない石がある。なぜなら、そういう石は、有用でも美しくもないからである。あなたは、そのような石と交換に、何かを与えはしないだろう。それは、その石が、容易に手に入るからではなく、その石を欲しないからである。<sup>(30)</sup>」

「非常に価値のあるものは、大変多くの労働を要している。このことは、人々にものの価

---

注 (26) Whately, "ILOPE" p. 7.

(27) Whately, "ILOPE" p. 8.

(28) Richard Whately, *Easy Lessons on Money Matters; For the Use of Young People*, London, John W Parker, West strand, 1833.

(29) Richard Whately, *Easy Lessons on Money Matters* [1833] p. 27.

(30) Richard Whately, *Easy Lessons on Money Matters* [1833] p. 28.

値を与えるのは、そのものにかたむけられた労働であると思わせるかもしれない。しかし、これは全くの誤りである。そのものが高く売れる原因は、それが必要とする労働ではない。逆に、それが高く売れるということによって、人々は、それを獲得する労働を行うのである。<sup>(31)</sup>」

このことは、ウェイトリーが、交換メカニズムを、究極的には主体の意志決定に端を発しているものとしてとらえていることを意味するのである。

しかし、富の学と交換の学は、観点が異なるだけで、交換の対象となるものを富とするという限定条件があれば、矛盾しないと、考えられているようである。

「人間は『交換をする動物』であると定義されるだろう。他の動物は、たとえその他の点で理性に近いことをしても、とにかくあるものを他のものと交換したり、所有したりしないのである。そして、人間が経済学によって考察されるのは、この見地においてのみである。この見方は、本質的にはアダム・スミスの見方とは異ならない。なぜならこの学において、富という語は、交換可能な商品に限られているからである。そして、富の学は、富を、交換の対象である、あるいは、交換の対象であると想定している場合のみ、取り扱うからである。<sup>(32)</sup>」

しかしながら、富の学と交換の学の分析観点の相違は端的にこの点にあらわれている。経済主体の意志決定に財が従属されることによって、交換法則は、経済主体の意志決定から引き出し得るものとなるのである。もちろん、富の学においても、需要を通じて主体の意志決定が反映されるであろう。しかし、ここでは需要理論それ自体と交換理論のミクロ的観点を峻別して捉えている。その場合、財の主観的評価の導入は、実は、ミクロ的観点の登場と対応したものと考えることができるのではなかろうか。

(3)方法論的個人主義。ミクロ分析が可能となるためには、ミクロ主体の特性が捉えられていないてはならない。そのためには、経済主体の行動の特性を人間行動の他の諸側面から切り離し、抽象化しなくてはならない。ウェイトリーにおいては、抽象化さらには論理化はほとんどなされていない。つまり、各主体が財にたいして独自の効用を持つというようなかたちでの効用理論に相当するものを展開していないのである。

しかし、ウェイトリーは断片的に、経済主体は利己的なものであり、またその利己性は道徳的な意味で非難されるべきものではないと言っている。このような断片的な言明を総合すると、ウェイトリーの主張の大略が姿を現すように思われる。つまり、経済主体を、法や道徳の問題から切り離して、交換メカニズムの論理的起点に設定することができ、またそうすべきということである。彼

---

注 (31) Richard Whately, *Easy Lessons on Money Matters* [1833] p. 32.

が交換主体を抽象化するうえでの主要な課題は、第一に、社会秩序形成ないしは社会的正義の確立の問題と経済主体の特性をどう関係づけるか、あるいはどう切断するかということであり、第二に、経済主体の特性を道徳判断の対象から切り離すという問題である。

まず、市場における主体行動が、社会秩序の存立を打ち崩すものではないことが、次のような文脈のうちに説明されている。ウェイトリーは、第六講義で、文明化が進んだ国を想定し、その文明化の度合いを次の二点で定義する。第一に一定の分業が発達していること、第二に財産の安全性が認識されていることである。<sup>(33)</sup>そして、ウェイトリーは第二のほうを強調し、第一点よりも本質的な前提条件であるという。むしろ、第二の財産の安全性が保証されるなら、第一の分業はおのずと発生すると考えられている。<sup>(34)</sup>この場合の分業は、ウェイトリーが明示しているとおり、工場内分業による生産性の向上が、技術の熟練によって生ずる以前の段階での分業のことである。ウェイトリーは、例として、砂漠のキャラバンの分業（火をおこす者、水を汲む者、というような一時的分業）をあげている。<sup>(35)</sup>そこにおいては、財産の安全性という合意さえあれば、各人が異なった仕事に従事でき、たとえ熟練による生産性の向上がなくとも、別業に分散することによって、分業の効果があると考えられている。また、ウェイトリーは、分業と交換は表裏一体をなすものと考えているので、ウェイトリーが交換のメカニズムを考える上で対象としている社会では、財産の安全性は前提条件になっている。それゆえ、主体の利己性は、ホッブス的な自己保存とは明確に区別されていると言わねばならない。一定の社会秩序を所与として、そこでの所有権の確立を保証する経済主体を問題にするという意味で、ウェイトリーは、交換主体の特性を、社会秩序形成の問題から切り離して考えるという態度を表明しているのである。

さらに、経済主体の利己性を道徳的是非の問題から切り離すことも、ウェイトリーは考えている。ウェイトリーは、“selfishness, the envy-injustice and baseness of every kind” は富の増加をもたらさないと<sup>(37)</sup>言う。なぜなら、貧国、野蛮国にも “avarice, fraud, vanity, envy” はあるが、富は増加しないから<sup>(38)</sup>と<sup>(39)</sup>いっている。「継続する競争の刺激」ないしは、「他の者に優越すること」、<sup>(39)</sup>相対的な富獲得の欲望というものを、交換を考察するうえでの経済的利己心として考えている。そして「富の欲求」あるいは「競争」は、一般に程度の差で、貪欲であるとか、悪徳であるとか言われるが、それ自体、悪徳でも美德でもない<sup>(40)</sup>と、ウェイトリーは主張する。ウェイトリーにとって経済主体の特性としての経済的利己心は、人間の普遍的本性や道徳的徳性から分離されている。それ

---

注 (32) Whately, “ILOPE” p. 7.

(33) Whately, “ILOPE” p. 133.

(34) Whately, “ILOPE” p. 133.

(35) Whately, “ILOPE” pp. 137-138.

(36) Whately, “ILOPE” p. 141.

(37) Whately, “ILOPE” p. 145.

(38) Whately, “ILOPE” p. 145.

(39) Whately, “ILOPE” p. 145.

(40) Whately, “ILOPE” pp. 145-146.

は交換メカニズムを動かす要因として、一定の交換経済を説明するために考え出された概念であり、道徳判断を排除した概念である。

このようにして、ウェイトリーは、経済主体の行動の特性を、人間行動の他の諸側面から切り離し、抽象化した。しかしながら、経済行動の特性を論理化することには成功していない。このことは、とりもなおさずマイクロ分析の視点を内包する重要なヴィジョンは提供したものの、マイクロ分析そのものは、展開しえなかったウェイトリーの限界であろう。ウェイトリーが成しえたことは、今日という経済人の特性を交換現象に結びつけながら、演繹法則、主観的価値論という側面を内包する交換の学のヴィジョンを提供したことであった。それによって、当時としては目立たないながら、オックスフォードやダブリンを中心に、経済現象を主体行動に基づく交換メカニズムから捉えようとする学問の動向が胎動を始めたのであった。この胎動は、イギリス限界革命の基本的視角の先鞭となるものであろう。

## (b) ウェイトリーの交換の学の位置づけ

前項では、ウェイトリーの交換の学が「交換現象を交換主体の主観的な選択行動に基づいて論理化する」問題視角を有することを、『経済学講義序説』をもとに説明した。この点をより明確に位置づけるために、ここではまず市場のマイクロ分析をおこなったジェヴォンズとウェイトリーとの共通点を検討し、次に富の学を展開したスミスとウェイトリーとの相違点を吟味してみることにしよう。

### (1) ジェヴォンズとウェイトリー

ウェイトリーは、効用理論も限界分析も展開していない。したがって、ウェイトリーはジェヴォンズの限界効用理論という分析道具の先駆者とは言えないであろう。しかし、ジェヴォンズの交換理論をつらぬくマイクロ分析の視角は、ウェイトリーと共通するものである。そのみならず、ウェイトリーの『経済学講義序説』が、ジェヴォンズの理論の下敷きになっている可能性がある。

ジェヴォンズとウェイトリーの関係で、よく知られているエピソードは、ウェイトリーの『やさしい貨幣問題講義』を、ジェヴォンズの母が、ジェヴォンズが9歳のころ読んで聞かせたという事実である。この本の中にある、「価値は、労働によって決まるのではない」という考え方が、ジェヴォンズの効用理論への最初の接近であったかもしれない。<sup>(41)</sup>しかしさらに興味深いことは、ジェヴォンズが、ウェイトリーの『経済学講義序説』を読んでいるということである。ジェヴォンズは、オーストラリアで試金官を勤めながら、次第に経済学に興味をもち、イギリスに帰って本格的に勉

注(41) Harriet A. Jevons ed. *Letterw and Journal of W. Stanley Jevons*, 1886 p.5. R. S. Howey, *The Rise of the Marinal Utility School*, Laurence Univ. Kansas Press 1960.

福岡正夫「ウィリアム・スタンレー・ジェヴォンズ ー没後百年ー」三田学会雑誌76巻1号, 1983, p.20.

ただし、ジェヴォンズの理論展開において、ウェイトリーの影響が決定的でしかも理論の基礎になっていることを必ずしも主張するものではない。

強を始めるまでの期間にあたる1857年に、次のような文章を日記に書き残している。<sup>(42)</sup>

「一から十まで利己的な多くの人々が、公正で自由な競争を通じて常に確保される、有益にして公平なる措置によって、いかにして無意識のうちにあるいは少なくとも意図せずして、全体の利益のために一体となって働くのか——これを示すのが、私の企図するところであった。これと同様のことが、ウェイトリーによって論じられているが、より高度で一般的見地からしか説明を加えておらず、それを神が人間に与えた社会的本能、すなわち文明社会においていつも成立する協業と交換の結果であるとみなしていた。これは、予期せざる造物主の御手の業を示す一例であることを思えば、その光彩、目を射るものであるといえよう。この議論について完全な同意を示さざるを得ない。そしてそのうちに、利己的な競争の原因、作動の様式、そしてその正確な影響などについて、もっと考えを、発展できたらよいと思っている。<sup>(43)</sup>」

この日記のなかでジェヴォンズが驚嘆をもって書き記しているとおおり、彼は利己的個人が織りなす交換メカニズムの分析視角に関するウェイトリーの見解に同意し、それをさらに発展させたいと願っていたのである。ジェヴォンズはこの時点で、利己的な競争の原因・作動の様式を理論的に展開しようと考え、そして、この着想が後年、交換方程式に体现されるミクロ的交換分析へと結実していった。

また一方で、ジェヴォンズは、スミスの『国富論』を読んでいる。それは、1856年の1月から3月にかけてである。<sup>(44)</sup>そして、先のジェヴォンズによるウェイトリーへの言及は、1857年4月5日の日記にみられる。興味深いことに、この言及の2カ月後、1857年6月17日の妹宛の手紙の中に、「古い著作の中に、スミス博士の『国富論』がある。この本は、すばらしい著作だが、むしろ古めかしい。」という叙述を見出す。さらに1858年2月28日のやはり妹宛の手紙で、『国富論』は、おそらく、<sup>(45)</sup>経済学上最も無味乾燥なものである。<sup>(46)</sup>とまで言っている。ウェイトリーの著作に対する驚嘆とは対照的な、ジェヴォンズの『国富論』に対する冷淡な反応をどう理解すべきであろう。

---

注 (42) オーストリアにおけるジェヴォンズの思想形成過程については、次を参照。

J. A. LA Nauze "The Conception of Jevons's Utility Theory" *Economica*, November 1953.  
Michael V. White "Jevons In Australia; A Reassessment" *Economic Record*, vol. 58, No. 160, 1982, pp. 32-45.

(43) R. D. Collison Black and Rosamond Könekamp ed. *Papers and Correspondence of William Stanley Jevons*, Macmillan Press 1972, vol. 1, Biographical Introduction, by Rosamond Könekamp pp. 157-159. R. ケーネカンブ、丸山徹著、『ジェヴォンズ評伝』、内川智子、中山千佐子訳、慶應通信、S. 61. pp. 108-109.

(44) Harriet A. Jevons ed. *Opcit.* p. 101, R. D. Collison Black and Rosamond Könekamp ed. *opcit.*, p. 27. Michael V. White, 前掲論文, p. 35.

(45) R. D. Collison Black and Rosamond Könekamp ed. *op. cit.*, p. 292.

(46) *ibid.*, p. 321.

ジェヴォンズに対するウェイトリーの影響が決定的であるかどうかは別の問題として、この両者の問題視角の共通性に注目することができるのではなからうか。そして、ジェヴォンズの問題視角と、スミスのその異質性、また同時にウェイトリーとスミスの異質性が捉えられるのではなからうか。今日我々は、スミスの『国富論』における利己心と見えざる手の関係を、主体の効用最大化行動と市場均衡の価格調整メカニズムに置き換えることが多い。しかし、イギリスで最初に主体均衡に基づく交換理論を定式化したジェヴォンズにとっては、「交換分析についての主体の主観的な選択行動からの論理化」を示唆するウェイトリーの問題視角と、必ずしもその方向への分析を推し進めなかったスミスの問題視角とは、峻別されるべきものだったのではなからうか。実際、経済現象の基礎に、主観的選択行動を行う個人像を設定し、そこから交換法則を演繹するという限界革命がもたらした特性が、ウェイトリーに始まるものであると位置付けることができるのではなからうか。

## (2) スミスとウェイトリー

ウェイトリーとジェヴォンズをつなぐ共通の視点は、交換現象の法則化が経済学の最も基本的な課題であるということ、さらにその法則が、利己的な個人行動から引き出されるということである。そして、交換に先立つ、財の生産における条件、たとえば生産費の問題や、賃金、利潤および地代への分配問題を捨象し、交換当事者の財に対する評価に基づく意思決定のみを、説明要因とすることである。このように経済現象を限定的にとらえることが、「交換の学」の分析視角であるならば、スミスの「富の学」とは、視点が異なるのではないか。

スミスの『国富論』は、神の見えざる手が、個々人の利己的なふるまいに、自然的調和をもたらすという考え方にのっとっているものとしてみなされる。しかし、このことと「交換の学」の視点は、同一ではない。

スミスの「見えざる手」の議論は、『国富論』のなかで、一箇所だけ出てくる。

「ところである人が、産業の支持に資本を利用するのは、ただ利潤のためだけにそうするのであり、したがって彼は、生産物が最大の価値をもちそうな、すなわち、それが貨幣またはその他の財貨いずれかの最大量と交換されそうな産業の市場に、それを使用しようとつねに努力するのである。

ところが、あらゆる社会の年々の収入は、つねにその産業の年々の全生産物の交換価値と精確に等しい。否むしろこの交換価値と精確に同一物なのである。それゆえ、あらゆる個人は、自分の資本を国内産業の支持に使用すること、したがってまた、その生産物が最大限に多くの価値をもちるように、この産業を方向づけること、この双方のためにできるだけ努力するのであるから、あらゆる個人は、必然的に、この社会の年々の生産物をできるだけ多くしようと骨おることになるのである。——この場合もその他の多くの場合と同じように、見えない手(an invisible hand)に導かれ、自分が全然意図してもみなかった

目的を促進するようになるのである。<sup>(47)</sup>」

ここで言われていることは、個人が資本の用途について、自分の利益を最大化すると、見えざる手の導きによって、社会の年々の収入が最大になるということである。ここで導かれてくる帰結は、必ずしも価格調節機能のことではなく、マクロの総収入の最大化である。故に、「見えない手」の議論をもって、交換現象のミクロ分析の視点があるとは言えないであろう。

一方、諸商品の価格はどのように扱われているか。スミスは、価格を賃金、利潤、地代の三つの部分から成るものとする。そして、次のように言って、商品の価値を労働によって測る。

「注意されなければならないのは、価格のすべてのさまざまな構成部分の実質価値は、そのおのおのが購買または支配する労働の量によって測られる、ということである。<sup>(48)</sup>」

さらにスミスの自然価格、市場価格の理論は、賃金、利潤、地代の自然率を支払うのに過不足ない自然価格へ、市場への実際の供給量と自然価格をよるこんで支払おうとする需要者からなる有効需要量によって決まる市場価格が近づいてくるといものである。<sup>(49)</sup>需要は、個々の需要の合計であるという意味で、ミクロ的主体の意思決定に基礎をもつと考えることもできる。しかし、労働量および賃金、利潤、地代の自然率という概念が、価値、価格の説明要因になっているのであり、明示的に、交換主体の意思決定から交換法則を引き出そうとするものではない。

スミスにおいて富とは、「国民が年々に消費するいっさいの生活必需品および便益品」である。<sup>(50)</sup>つまり財は経験的にそしてマクロ的に把握されているのである。また、スミスによって分業は、人間の本性のなかにある一定の性向である交換性向から生じると考えられている。そして交換性向について次のように述べられている。

「果たしてこの性向は、人間の本性のなかにあるところの、これ以上説明できない本源的な諸原理の一つなのか、それともこのほうがいっそう確からしく思われるが、理性や言語と<sup>(51)</sup>いう諸能力の必然的な帰結なのか、それはわれわれの研究課題には属さないことである。」

スミスにとって、交換性向の特質をそれ以上さかのぼることは、研究の対象ではない。スミスは、「われわれが、自分たちの食事を期待するのは、肉屋やパン屋の仁愛ではなく、かれら自身の利

---

注 (47) Adam Smith, *An Inquiry Into The Nature and Causes of The Wealth of Nations*, R. H. Campbell and A. S. Skinner ed. Liberty Press 1981. pp. 455-456 『諸国民の富』大内兵衛、松川七郎訳、岩波文庫、1985、III、p. 56. 以下、『諸国民の富』と書く。

(48) *ibid.*, p. 67. 『諸国民の富』p. 191.

(49) *ibid.*, pp. 72-81. 『諸国民の富』pp. 201-218.

(50) *ibid.*, p. 10. 『諸国民の富』p. 89.

(51) *ibid.*, p. 25. 『諸国民の富』p. 116.

益に対するかれらの顧慮に期待してのことなのである。」<sup>(52)</sup> と言って、交換が自愛心からなされていることに触れている。しかし、交換現象をその自愛心から、論理的に説明することは、スミスの意図しないところであった。交換活動の背後には、自愛心があるが、『国富論』では、交換性向を所与のものとして、富の生産と分配の問題を中心に、議論を展開するという方針が、貫かれているのである。このことは、方法論的个人主義を採用し、原子論的な問題視角で、交換理論のミクロ分析を行ったメンガーが、スミスの交換性向について指摘していることとも符合する。<sup>(53)</sup> スミスの『国富論』において、経済現象は、経済主体の利己性、欲望、あるいは意志決定そのものを論理的起点として把握されているとは言い難いのである。むしろ、市場のミクロ分析とは、必ずしも軌を一にするものではない、スミス独自の自然価格・市場価格理論が、根底にあると言えるのではなからうか。

以上のような点から、スミスの富の学の体系とウェイトリーの交換の学の体系とは、その視点を全く異にするものと言わねばならない。そして、富の学から交換の学への変移は、マクロ的な富の生産・分配の問題から、ミクロ的な主体の意志決定に基礎をおく交換問題への重点の移行に照応するものとしてとらえられるのではなからうか。さらに、ウェイトリーの交換の学には、イギリスの限界革命の分析視角を準備したものとしての位置を与えることができるのではなからうか。

### 3. ウェイトリーの交換の学の思想的背景

2節では、ウェイトリーの交換の学をミクロ分析の視角を有するフレームワークとして再構成した。この節では、そのような分析視角が、ウェイトリーをとりまく思想とどのような関係があるかを考察する。(a)では、ウェイトリーの方法論認識基盤について、それが『経済学講義序説』にあらわれるかぎりにおいて言及する。(b)では、交換の学における主体に関する認識と功利主義体系、特にベリーの神学的功利主義における快樂主義的人間像との関係を論ずる。そして最後に、(c)でマundeヴィルの思想との関係を考察する。

#### (a) 自然神学から演繹科学へ

前節で、経験法則から演繹法則へ、そして物質主義定義から稀少性定義への変化が、交換の学という視点のなかにあることを述べた。この背後に、どのような認識論が存在するのだろうか。この問題に関する詳細な研究は本稿の課題ではない。しかし、次の点は指摘できる。ウェイトリーは、『経済学講義序説』において方法論および認識論に言及する場合、ウェイトリーの著書『論理学綱要』から引用している。つまり彼の財認識と経済構造内での交換メカニズムの論理化をめざす方法的認識は、『論理学綱要』と密接につながっている可能性が高いのである。

ウェイトリーの『論理学綱要』は、イギリスで停滞していた論理学に対する関心を、復活させた

注 (52) *ibid.*, p. 26. 『諸国民の富』 p. 118.

(53) Carl Menger, *Gruntzüge der Volkswirtschaftslehre*, Wien 1871 Wilhelm Braumüller p. 153.



ものとして、論理學史上評価されている。J. S. ミルやド・モルガンによっても、イギリスの論理學研究の再興者として高く評価されている。<sup>(54)</sup> J. S. ミルは、1828年、「ウェイトリーの『論理學綱要』」と題する書評を書いている。この書評について、レズリー・スティーヴンは、ミルのウェイトリーに対する批判は、ミルがウェイトリーの原理に先見論的仮定をかぎとっているためだとい<sup>(55)</sup>う。ウェイトリーの認識の基盤は、イギリスの伝統的な経験論と異質なものである可能性が高いのである。<sup>(56)</sup>しかし、この『論理學綱要』と『経済學講義序説』との関係についての考察は別稿にゆずる。

この項で指摘したいもう一つの点は、ウェイトリーが財と主体のあいだの相互連関のメカニズムをどのようにして読み取ったかということについてである。ウェイトリーの『経済學講義序説』を読むかぎり、このことは自然神學の発想からきていることがわかる。

ウェイトリーは、経済學を志すうえで、「ペリーの自然神學の方法を経済學に応用するのが目標である<sup>(57)</sup>」と言っている。ペリーは、ケンブリッジ出身の神學者で、1802年に『自然神學』という本を刊行している。レズリー・スティーヴンは、ペリーの書物を、次のように特徴づけている。すなわち、「我々は時計から時計匠を推論する。これと同じ推論によって我々は、自然的装置から神という工匠を推論する、という定理を裏書きする事例の集積である。<sup>(58)</sup>」この自然神學が、ウェイトリーの『経済學講義序説』において果たす役割について検討してみよう。

ウェイトリーは、第四講義で、経済學と自然神學の関係を次のように論じている。

「注意深く率直に研究してみれば、社會の進歩に対してなされた摂理ほど神の知恵が見出されるものはない。人間の肉體については、容易に気づくが、社會の進歩については、見過ごされやすい<sup>(59)</sup>。」

つまり、人間の肉體のメカニズムの精巧さから考案者としての神を想起する自然神學と同様に、社會の相互依存のメカニズムから考案者としての神を推論するのである。このような発想は、ウェ

---

注 (54) J. S. Mill, *A system of Logic: Ratiocinative and Inductive*, Collected Works of John Stuart Mill, vol. VII-VIII, 1966, p. 4.

Augustus De Morgan, *On the Syllogism and Other Logical Writings*, P. Heath ed. 1966, p. 247. 井上琢智『ジェヴォンズの思想と経済學』日本評論社, 1987, p. 105.

(55) Westminster Review, VI (Jan. 1828), pp. 137-72, headed, "Art. VII: I. *Element of Logic*, Comprising the Substance of the/Article in the Encyclopedia Metropolitana, with additoinis, & c. by/Richard Whately, D.D. Principal of St. Alban's Hall, and late/Fellow of Oriol College, Oxford, London Mawmam. 1826./2. The Second Editoin of the Same, 1827", 杉原四郎, 山下重一編『J. S. ミル初期著作集』「ホエートリー『論理學綱要』(抄) (1828)」

(56) Leslie Stephen, *The English Utilitarians*, New York: Peter Smith, 1950, iii, p. 9.

(57) E. Jane Whately, *Life and Correspondence of Richard Whately D.D.*, Lodon I, 1866, p. 67.

(58) Sir Leslie Stephen, *History of English Thought in the Eighteenth Century*, A Harbinger Book 1962 Harcourt, Brace & World. INC. New York & Burlingame, pp. 346-347. L. スティーヴン『十八世紀イギリス思想史』中野好之訳, 筑摩叢書, 1969, 中巻, p. 110.

(59) Whately, "ILOPE" p. 92.

イトリーの中で二つの方向へ向かう。一つは、社会の経済的分業と交換のメカニズムそのものへ、一つは、社会の文明の起源への問題である。後者については、第五講義で述べられ、つまるところ、文明の始まりは、神の介入なしでは不可能であることのすぐれて神学的な論証がもくろまれている<sup>(60)</sup>。一方、前者の場合、自然神学の発想は、ウェイトリーに社会科学を想起させることにつながっている。

ウェイトリーは、まず、人間は生まれつき本性として社会のために働くようにできていると主張する。そして、これに対抗する見方は、社会的結合をおたがいの欲求 (want) のために作り出した便益として考えるものであると、ウェイトリーは言う<sup>(61)</sup>。この見方は、社会の一員としての人間行為を、人間の企図に帰着させており、神の知恵を人間の知恵と取り違えていると、ウェイトリーは主張する<sup>(62)</sup>。この神の知恵に還元するという主張は、形而上学的色彩が濃い<sup>(63)</sup>が、ウェイトリーの思考全体の中での神の役割は、文明起源論を除けば、一見するほど大きくないのである。問題は、社会的結合を神の知恵に帰着させることで、神の意志を神学的に分析することにあるのではなく、人間の意図した先慮に還元させないことなのである。社会的結合と相互依存を人間が企図したものとして分析するのではなく、人間の企図の及ぶ範囲を自らの経済的欲求の達成に限定し、その限定された企図にもとづく各個人の行為の社会的結合関係を、人間の先慮に依存することなく作動するメカニズムとして認識しているのである。だからこそ、そのメカニズムがいかにして神によって考案されたのかは問題とせず、いかにしてそのメカニズムが機能しているのかが問題となるのである。ウェイトリーは、

「船をつくる者や運行させる者が、商品交換に依存する国富や国力、国の改善や快適さについて、また他の商業の帰結について考えないのは、呼吸作用による肺の血液浄化について、彼らが考えないのと同じである」<sup>(63)</sup>

と言って、人体のメカニズムのアナロジーとして社会のメカニズムを想起するのである。

このように、自然神学の発想を経済学に应用するということは、自然現象を考察するようにして経済現象を考察すること、すなわち、経済学を科学としてとらえようとするウェイトリーの意図と表裏一体をなすものである。

## (b) ペィリーの神学的功利主義

前項において、ミクロ的認識の枠組みの方法論に関する部分についての思想的背景を指摘し、本稿の主要テーマを論ずる準備が整った。本稿のテーマは、交換の学における主体についての認識は、

---

注 (60) Whately, "ILOPE" lecture V, pp. 108-131.

(61) Whately, "ILOPE" p. 90.

(62) Whately, "ILOPE" p. 90.

(63) Whately, "ILOPE" pp. 92-93.

どのような思想を源泉としているか、ということである。

この問題を考えるにあたって、ウェイトリーがペイリーの自然神学の影響を受けている（前項参照）ことから当然、ペイリーの神学的功利主義とウェイトリーの利己的人間観の思想的継承関係が問われることになるであろう。とりわけジェヴォンズの効用理論の展開にあたって、ペイリー＝ベンサム の快楽主義的人間観が利用されていることを思うならば、このような問題設定はいたって自然である。しかし結論を先取りするならば、ウェイトリーとペイリーでは、社会秩序形成についてまったく異なる認識を持っており、そのために、ペイリーの利己的人間像とウェイトリーのそれは、質的に異なり、それを基にしたメカニズムの読み取り方が全く異なると言わねばならない。そのため、ペイリーの神学的功利主義をウェイトリーの社会認識の源泉として考えることは、実は困難と思われる。

ウェイトリーは、『経済学講義序説』でペイリーの道徳哲学には言及していない。ウェイトリーの、ペイリーの神学的功利主義に対する評価は、『ペイリーの道徳哲学：リチャード・ウェイトリーによる評価付』（*Paley's Moral Philosophy: with Annotation by Richard Whately D.D. 1859 London*）を参考にできる。この本は、ペイリーの『道徳ならびに政治哲学』（1875）の BOOK III までを復刻し、ウェイトリー自らの批評を節毎につけたものである。ペイリーは、BOOK I の「準備的考察」で自分が立脚する原理を7章にわたって論じている。BOOK II で道徳的義務、BOOK III で相対的義務、BOOK IV で自分自身に対して持つ義務、BOOK V で神に対する義務を具体的に説明している。ここでは、ペイリーが持っている説明原理をとらえて、ペイリーの考えとそれに対するウェイトリーの見解を考察する。

神学的功利主義は、「不変的恒久的な標準となるものは神の法<sup>(64)</sup>」であり、神の意志はただ啓示によってのみ見出される<sup>(65)</sup>。」と考える点において神学的であるが、神が人間の幸福をそもそも意図しており、人間はそれゆえその神の意図に従っておのずと自らの幸福を促進しているということが前提となっているので、神の意志と個人の幸福追求が一体となって機能している。そして、明示的な善の尺度は、全体的幸福つまり一般的功利に求められ、背後に神を登場させながら同時に功利主義の体系を保持しているのである。

ペイリーの『道徳ならびに政治哲学』が1785年に出版された時、ベンサムの友人が「ベンサムの道徳と立法の原理」の教説を先取りした新しい論者が<sup>(66)</sup>出た<sup>(67)</sup>」と言ったほど、両者の考えは似ている。ペイリーの神学的様相を抜きにしてしまえば、両者は、功利の基準を採用、感覚の快楽への還元化という点で酷似している。レズリー・スティーヴンは、「ペイリーは骨の髄までの体系設定者であ

注 (64) Sir Leslie Stephen, *History of English Thought in the Eighteenth Century*, p. 71. L. スティーヴン『十八世紀イギリス思想史』1969, p. 258.

(65) *ibid.*, p. 71. L. スティーヴン『十八世紀イギリス思想史』1969, p. 259.

(66) William Paley, *The Principle of Moral and Political Philosophy*, Reprint of 1785, New York, Garland pub, 1978.

(67) Sir Leslie Stephen, *History of English Thought in the Eighteenth Century*, p. 106. L. スティーヴン『十八世紀イギリス思想史』1969, p. 301.

って、決して独創的思想家ではない<sup>(68)</sup>」と述べ、むしろベンサム<sup>(69)</sup>の独創性に注目している。逆に、E. アルビーは、イギリス固有の功利主義思想の変遷を、J. ロックにはじまり、J. ゲイ、A. タッカーそしてペィリーに到る系譜を中心に捉えている<sup>(70)</sup>。

ペィリーはケンブリッジ<sup>(71)</sup>の出身であり、彼の『道徳ならびに政治哲学』は、長くケンブリッジの教科書として用いられていた。ケンブリッジ大学の教授、ウィリアム・ヒューエルは、その著書、『道徳哲学史講義』<sup>(72)</sup> (1862)の中で、ペィリーの体系について言及している。そしてケンブリッジの道徳哲学の在り方についてつぎのように述べている。「我々ケンブリッジの道徳家は、形而上学的分析よりもむしろ、利己的原理に則った道徳体系を構築することに従事していた<sup>(73)</sup>」のであり、「形而上主義的スコットランド学派は、人間の能力とその原理の分析に没頭しており、このより広い思索において進展しようと努力していた<sup>(74)</sup>。」さらに、ケンブリッジでは、そのようなスコットランド的な問題を避けて、ロックに則ったと言う。

このようなケンブリッジの道徳哲学に対して、ウェイトリーはどのような見解を持っていたのだろうか。ウェイトリーは、道徳哲学の系譜の中でペィリーを次のようにとらえている。ペィリーの思想内容は、タッカーの「自然の光明」から引き出されており、ペィリーはその書物から価値ある部分を引き出していないと述べて、暗にペィリーの独創性の無さを示唆する<sup>(75)</sup>。しかも後述するペィリーの道徳感覚を批判する見方は、タッカーの独創でもなく、ホブズの「リヴァイアサン」<sup>(76)</sup>においても見られ、アリストテレスにもある見方だと主張する。このことから、ウェイトリーは、ペィリーの見方を、ホブズからロック、ゲイ、タッカーへつながら利己的人間観に基づくイギリスの功利主義体系の一つに過ぎないものとしてとらえていることがわかる。

それでは、ペィリーが提示する快楽主義的人間とはどのようなものであるか。ペィリーは、社会秩序の形成について説明するのに、人間に道徳感覚が存在するとは考えない。例えば、森の中で人間に育てられることなく生きてきた少年に道徳感覚が存在するか否かという問題を提起し、人間に固有な道徳感覚が存在することを否定する<sup>(77)</sup>。そして、第6章において、快楽主義的人間を設定する<sup>(78)</sup>。

---

注 (68) *ibid.*, pp. 102-103. L. スティーヴン『十八世紀イギリス思想史』1969, p. 296.

(69) E. Albee, *A History of English Utilitarianism*, London S. Sonnenschein 1902.

(70) Sir Leslie Stephen, *History of English Thought in the Eighteenth Century*, pp. 343-344. L. スティーヴン『十八世紀イギリス思想史』1969, p. 106, ペィリーは、1763年の首席卒業生である。クライスト・カレッジで倫理学、形而上学、神学を講義している。

(71) *Paley's Moral Philosophy With Annotation by Richard Whately D. D.* Londn John W. Parker and Son West Strand 1859, p. iii, 以下, "PMP" [1859] とする。

(72) William Whewell, *Lectures on the History of Moral Philosophy*, Cambridge 1862, p. 155.

(73) *Ibid.*, p. 155.

(74) *Ibid.*, p. 155.

(75) "PMP" [1859] p. 9.

Abraham Tucker, *The Light of Nature Pursued*, 2 ed. London 1805.

(76) "PMP" [1859] p. 27.

(77) "PMP" [1859] pp. 17-22.

すなわち、神経における刺激と強度の持続性によって、快苦を計算する人間である。彼は、このような人間像を基にして社会的な人間、そして社会秩序を次のように説明する。まず、幸福の状態を次のように定義する。それは、快の量が苦痛の量を上回る状態であり、また幸福の程度は、この超過に依存すると言う。そして快は、その継続と強度以外に異なるところはないとする。<sup>(79)</sup>つまり、幸福という状況を、人間の神経系統における快楽の継続と強度にまで還元するのである。そして、何に人間の幸福が存在し、何に存在しないかを、人間の神経における快の持続と強度の計算に基づいて論証する。継続性が長く、容易に新鮮さをもたらすものが人間の幸福であり、長続きせずに、すぐ新鮮さを失うような快しかもたらさないものは、幸福ではないとする。<sup>(80)</sup>その論法をもとにして、感覚的快楽や、単に苦痛を逃れることは、人間の幸福ではなく、社会愛の行使、あるいは、何らかの目的に向かって自分の能力を用いることが、人間の幸福であるとする。<sup>(81)</sup>このように、快楽主義的人間が、快の継続性と強度の保持を長期的に追求することで、道徳的、社会的な人間に引き上げられる。

さらに、社会的、対人的な義務、正義といった秩序の形成については、功利の原理を用いる。ベィリーは、「道徳的規則の義務を形成するものは、その規則の効用だけである」と言う。<sup>(82)</sup>特定の効用ではなく一般的効用が基準として重視され、一般的に有益であることが正しいと考えられている。この一般的功利と個人の快楽計算が、ベィリーの場合には、明確には関係づけられていないが、対応関係にあると言える。一般的功利は、個人の快苦を基礎としており、特殊な個人の特殊な快ではなく、社会構成員の一般的快が、一般的効用につながるのである。何らかの社会制度の存在理由は、その秩序が一般的功利にかなっているということに求められる。たとえば、所有制度の有用性を、土地の生産性を向上させ、土地の生産物を成熟状態に保ち、争いを防止し、生活の便益を改善するという四つの要因に求め、所有制度の存在理由を説くのである。<sup>(83)</sup>

このようにして、ベィリーは、快楽主義的人間を基礎にして、社会的な人間と社会秩序を説明する。これに対して、ウェイトリーはベィリーの道徳感覚の存在否定を批判する。ウェイトリーは、「生まれた時にともなっていないものや、一人でいて自発的に展開していかないものを人間にとって自然的でないとするのはおかしい」とのべて、<sup>(84)</sup>ベィリーの道徳感覚の否定を批判する。人間が本来、善悪判断の能力がなく、神の意志が善であるとするベィリーの主張は、善や正義にいかなる意味も与えぬ循環論法だと主張するのである。<sup>(85)</sup>そして、人間が生来果たさなくてはならない義務としての固有の道徳格率の存在問題と道徳的能力の存在問題とは峻別されなければならない、と主張す

---

注 (78) “PMP” [1859] pp. 37-42.

(79) “PMP” [1859] p. 32.

(80) “PMP” [1859] pp. 32-33.

(81) “PMP” [1859] pp. 36-38.

(82) “PMP” [1859] p. 80.

(83) “PMP” [1859] pp. 104-105.

(84) “PMP” [1859] p. 23.

(85) “PMP” [1859] p. 24.

<sup>(86)</sup>るのである。固有の道徳的格率の存在を否定する点は、ペィリーもウェイトリーも軌を同じくしているとは言え、人間が何の規則も道徳も存在しない無秩序な状態から、自発的に何らかのシステムを形成し、その中で道徳的格率を作る能力を具備していないとは、かならずしも言えないとウェイトリーは考えているのである。

ウェイトリーは、いかにして社会秩序が形成されるかという視点に立ちながら、社会秩序は何故現存の形態で形成されているかという、ペィリーの功利主義的解答に批判を加えている。両者の決定的相違は、次の点にある。ペィリーには、一般的功利を計る立場が暗黙のうちに想定され、秩序が設計主義的見地から論じられている。これに対して、ウェイトリーは、各個人が一般的功利を計ることの困難さを指摘し、むしろ人間の道徳的、社会的結合能力に基づいて、社会秩序が自発的に形成されるものとして、とらえている。

このように、社会秩序の形成について異なる認識を、ペィリーとウェイトリーが持っているが故に、ペィリーにおける快楽主義的人間像とウェイトリーにおける私的利益を追求する主体は、本質的に異なる。ペィリーにおいて、ある社会秩序は、一般的に有用であるから存在している。一般的に有用であるという意味での Utility は、各個人の幸福を基盤として構成される。各個人の幸福は、快楽主義的人間の快の持続と強度に還元される。それゆえに、社会秩序は、快楽主義的人間の快の持続性が長く、強度が強いから存立しているのである。このような関係を考慮に入れると、次のことが言える。ペィリーの体系のなかでは、快楽主義的人間が各自表明する快楽の量を計算単位として、社会秩序の望ましさを示す Utility という指標が構成されるのである。

一方、ウェイトリーの交換の学における私的利益を追求する主体は、社会秩序内で一定のルールに従って行動する主体なのである。前節で述べたように、ウェイトリーは交換経済を考える場合、財産の安全性を前提に置く。その場合、ウェイトリーの交換の学における利己的個人とは、市場成立の最低限のルール（所有権確立、契約遵守など）を守ったうえで、富獲得の欲望に従って行動する人間である。このような人間観の認識が、ウェイトリーによってどのようにしてなされているかを、彼の考え方にそってしてみると、次のようになる。まず、道徳的能力を持った個人が、自発的に一定の社会秩序を形成する。その社会秩序で財産権などが確立している場合、その秩序はルールとして外在化される。そしてその秩序を基盤として、市場という新たな秩序に一定のメカニズムが、働いていることが認識される。そこで、このメカニズムを個人の行動から説明するために、外在化されたルールを前提とした行動様式が、市場秩序内での人間の特性として抽象化され、取り出されて来るのである。このようにして認識される市場における主体行動は、市場の基盤となる秩序のルールを、ルールとして完全に受け入れてしまう主体として抽象化されているので、そのルールに是非の判断を下すという性質を備えていない。

このように、ペィリーの原理の基礎をなす快楽主義的人間像と、ウェイトリーの交換の学における私的利益を追求する人間像は、それぞれの社会秩序形成の捉え方の中で対比すると、全く性格が

---

注 (86) “PMP” [1859] p. 28.

異なるのである。前節の最後に述べたように、ウェイトリーが、経済問題を社会秩序形成と道德問題から一線画したうえで、経済主体を市場メカニズムの論理的起点に設定することが、交換の学という枠組みを提示するために、重要であった。しかしここで説明してきたペリーの快樂主義的人間観とウェイトリーの利己的人間観の相違を考慮に入れるなら、ペリーの神学的功利主義の思想に基づいて、ウェイトリーが交換の学を提唱したとは、考え難い。ジェヴォンズが、効用理論を展開するうえで、功利主義の快樂計算を利用したのであるが、功利主義体系の中で快樂主義的人間のもつ意味内容は、交換の学におけるミクロの主体行動のそれと別種のものである。

### (c) マンデヴィルの「私悪即公益」

この節で考慮することは、ウェイトリーの交換の学の思想的母体が、マンデヴィルの「私悪即公益」という考え方に求められるのではないか、ということである。

マンデヴィルは、オランダ生まれの医者で、後にロンドンに移住し、1705年に「ブンブンうなる蜂の巣」と言う詩のパンフレットを公刊した。<sup>(87)</sup>その後、1714年に注釈を加えて、『蜂の寓話—私悪即公益』<sup>(88)</sup>として出版した。その詩の内容は、人間社会になぞらえた蜂の巣がはじめ悪徳に満ちていたが、非常に繁栄していたというのである。

「こうして悪徳は巧妙さをはぐくみ  
それが時間と精励とにむすびついて  
たいへんな程度にまで生活の便益や  
まことの快樂や慰安や安樂を高め  
おかげで貧乏人の生活でさえ  
以前の金持ちよりよくなって  
足りないものはもうなかった。」<sup>(89)</sup>

ところがジュピターの神が怒り、それによって蜂の巣が有徳になり、儉約になり、また正直になった途端、商工業が衰退してしまったというものである。このようなマンデヴィルの『蜂の寓話』

---

注 (87) Bernard Mandeville, *The Grumbling Hive: or Knaves Turn'd Honest* London, 1705. 『ブンブンうなる蜂の巣』匿名で出された。1714年, *The Fable of the Bees, Part I* (London)「緒言」, 「ブンブンうなる蜂の巣」, 「序文」, 「美德の起源についての考察」20項目からなる注釈から成る。1723年に同題で出版され, 「注釈」が22項目からなり, 新たに, 「慈善と慈善学校についての試論」「社会の本質についての考究」「索引」が付け加えられた。1729 (1728) 年に Part II (下巻) が出版された。

(88) Bernard Mandeville, *The Fable of the Bees or, Private Vices, Public Benefits*, 1714. F. B. Kaye ed. Oxford Clarendon Press 1924.

(89) *ibid.*, p. 26. バーナード・マンデヴィル『蜂の寓話』—私悪すなわち公益—, 泉谷治訳, 法政大学出版局, 1985, p. 22.

は、スミスの自由放任の思想の基礎になっているといわれている。<sup>(90)</sup>

本稿では、『蜂の寓話』をウェイトリーがどのようにしてとらえ、その解釈が交換の学にどうつながっているのかを考察する。

ウェイトリーは、第二講義のはじめに、経済学と宗教、道德の関係を論じ、次のようにマンデヴィルを引合に出している。

「富を美德に対して好ましくないとしてきたほとんどの道德家は、富を増加する傾向の手段や制度を提唱して、一貫性の欠如という罪を犯してきたのである。しかし、一人例外がいる。それは、今やその名前以外ほとんど知られていないが、その著作は、当時多大な注目を集めたマンデヴィル博士である。その著作『蜂の寓話—私悪即公益』は、非常に風変わりな<sup>(91)</sup>ものとして世間に受け取られた」

ウェイトリーが、マンデヴィルの何を高く評価しているかということ、次の点である。

「彼（マンデヴィル）は、あまり体系的あるいは包括的ではないが、ほんとうに鋭く、独創的精神の持ち主である。しかし、彼の独創性は主に、長いこと別々に考えるのが普通で、（実際、今でも残っているが）その非一貫性が、発見されることのなかった概念を並置させた<sup>(92)</sup>ことにある。」

つまり、それまで別々に考えられてきた二つの概念、私悪と公益というものを、並置させ、「私悪が公益につながる」と言うパラドキシカルなメカニズムを見抜いた点が鋭いと、ウェイトリーは評価している。さらに、ウェイトリーは、マンデヴィルが私悪を悪徳として奨励しているという一般的な批判から、マンデヴィルを弁護する。ウェイトリーは、マンデヴィルが帰謬法を用いて、私悪即公益という命題を主張していると言う。

「私は、多大な誠意を持って次のように言ってよいだろう。彼（マンデヴィル）の目的は、彼が対抗して書いている人達に対して、帰謬法を用いて反論していることである。しかしながら、私達は、彼の意図について決定的な判断を下す手段を持っていない。また、たとえあるとしても、その問題は目的とするところではない。彼は、すべて仮説にのっとって、また自ら好んでではなく、他者が彼にそのような形をとらせたような仮説にのっとって議

---

注 (90) Adam Smith, *An Inquiry Into the Nature and Causes of the Wealth of Nations*, Edited with an introduction, notes marginal summary and an enlarged index by Edwin Cannan 6th ed. London 1950, p. xlvii 『諸国民の富』岩波文庫, 1985, p. 73.

(91) Whately, "ILOPE" pp. 42-43.

(92) Whately, "ILOPE" pp. 42-43.



論しているということを述べれば十分である。また、その仮説にのっとって、彼は確かに成功している。つまり、もし、これこれのことが、かつて言い表されてきたように各々悪徳あるいは美德であるならば、そしてもし、国の富と国の繁栄が望ましいならば、そしてもし、これこれの手段がこの目的に役立つならば—そのとき、私悪が公益でなくてはならない—、ということが、否定できないだけでなく、ほとんど同値の命題でなくてはならない。彼の議論は、カテゴリーとして悪徳が奨励されるべきであることを示そうとしているのではない。悪徳と美德に関して、そして富の原因と結果に関して広まっている概念が、もし仮説として承認されるならば、そのとき国の富と国の美德は相いれないものでなければならない、<sup>(93)</sup>ということを示そうとしている。」

このようなウェイトリーのマンデヴィル解釈の意味するところは、一般的、経験的言語を用いて、経済的行為を表現した場合、そこに道徳的に悪徳としての解釈が付加されるが、そのような行為のカテゴリー分類についてマンデヴィルは主張するものではなく、一般的用法に則して仮説として命名しているに過ぎない、ということである。そして、ウェイトリーによれば、マンデヴィルの主張の骨子は、各個人の具体的な経済的利益を求める行為と社会的な富との機能的な関係そのものであるということになる。

マンデヴィルの思想は、人間の社会性をすべて人間の利己的な性格に還元するものである。その意味では、人間の道徳的能力を想定して、社会秩序の形成を考えようとするウェイトリーの考え方とおなじものではない。しかし、ウェイトリーは、マンデヴィルの説を、先に説明したように、帰謬法として受け取っているのである。その場合、私悪という呼び名は問題ではなく、私悪の指し示す人間の諸行為の内容そのものが問題であろう。そして、まさにマンデヴィルが私悪と呼ぶところのものは、ウェイトリーの交換の学における所有権の確立を保証するが、市場に参加する限りは、利益を少しでも多く得ようとする経済主体の特性とおなじものであるとウェイトリーは考えている、と言ってよいであろう。八幡氏は『マンデヴィルの道徳理論とスミス』の中で、マンデヴィルの解剖学的方法と称して、「現象の深部に伏在する本質をいったん抽象し、抽象された本質の分析によって現象を内在的に把握する方法」<sup>(94)</sup>について述べている。まさに、ウェイトリーの交換の学における、社会秩序形成および道徳問題から切り離された経済主体の特性である私的利益追求の人間像は、マンデヴィルによって、解剖学的方法によって抽出されたものである。

ウェイトリーの解釈に則ると、マンデヴィルの私悪即公益という考え方は、主体の特性を抽象化し、経済システムに機能的に関係づけるマイクロ分析の視点につながるものと言えるだろう。もちろん、マンデヴィルにおいて、公益とは、市場の需給メカニズムそのものではない。しかし、ウェイトリーがマンデヴィルから摂取したと考えられる重要な点は、次のことなのである。マンデヴィル

---

注 (93) Whately, "ILOPE" pp. 43-44.

(94) 八幡清文「マンデヴィルの道徳理論とスミス」『社会思想史研究』第二号, 1987, p. 115.

において、経済社会は、蜂の巣という一つの閉じた社会構造として捉えられ、この体系は、私悪という行為を単位として構成されている。このことは、市場を一つのモデルとして想定し、市場の構成員の市場内での行為が、モデルのシステムを動かしているという考え方に繋がっているのである。つまり、重要なのは、モデルのシステムと主体行為間の機能関係をとらえる視点なのである。

この視点の基盤となっている医者マンデヴィルの解剖学的方法と、自然神学の応用というウェイトリーの視点は、非常に類似している。

「法律や政治が市民社会の政治体にたいしてもつ関係は、生氣や生命そのものが、生物の自然体<sup>(95)</sup>にたいしてもつ関係と同じである。」

と言うマンデヴィルと、自然神学的な人体メカニズム分析のアナロジーで、社会を捉えようとするウェイトリーは、極めて発想の仕方が共通している。こうした発想法は、マンデヴィルが言う「人間はどうあるべきか」ではなく、「人間の現実にあるがままの状態<sup>(96)</sup>」を分析しようとする方向にながっていると見てよいだろう。

2節で述べたように、ウェイトリーの交換の学の提唱とは、主体行動を社会的正義と道徳的美徳から一線を画したうえで、その主体の利己性を市場分析の論理的起点に据えるような、財、主体の枠組みを設定することであった。そして、「経済現象内で行為している主体の本質を一度抽象化し、その抽象化された特性を用いて、経済現象に存在するメカニズム<sup>(97)</sup>を分析すること」が、そのような枠組みの、つまりミクロ的視点の重要な本質であり、マンデヴィルの解剖学的方法からウェイトリーの交換の学に受け継がれたものである。ここに、ウェイトリーの交換の学の思想的母体をみるのである。

#### 4. おわりに

本稿では、まずウェイトリーの交換の学をミクロ分析の視点を有するものとして捉え、それを演繹的方法、交換法則の主観的特性および方法論的个人主義の三要因から説明した。そして、その交換の学は、ジェヴォンズの交換理論の分析視角に通じるものであり、スミスの富の学とは一線を画するものであることを明らかにした。さらに、交換の学の思想的背景については、まず、自然神学とウェイトリーの論理学が、認識論、方法論の基盤を形成していることを指摘した。その基盤の上に、稀少性定義の財認識と演繹科学としての経済学が、打ち立てられている。そして、本稿の主要

---

注(95) Bernard Mandeville, *The Fable of the Bees or, Private Vices, Public Benefits*, p. 3. バーナード・マンデヴィル『蜂の寓話』—私悪すなわち公益—, 泉谷治訳, 法政大学出版局, 1985, p. 3.

(96) *ibid.*, p. 39. バーナード・マンデヴィル『蜂の寓話』—私悪すなわち公益—, 泉谷治訳, 法政大学出版局, 1985, p. 37.

(97) 注(94)の文を言いかえた。

テーマは、そのようなマイクロ分析の認識の枠組みの中に組み込まれている主体および市場メカニズムと主体間の機能関係は、どのようにしてウェイトリーに認識されたかということであった。先に示したように、その認識は、功利主義体系における快樂主義の人間像を源泉とするものではなく、マンデヴィルの「私悪即公益」という思想から発しているのである。

このようなマンデヴィルとウェイトリーの関係は、スミスとマンデヴィルの関係に新たな視点を提供するであろう。ウェイトリーとスミスでは、マンデヴィルの思想の受容の仕方に相違が認められる。このことは、ウェイトリー自身によって指摘されている。ウェイトリーは、スミスは、『道德感情論』<sup>(98)</sup>でマンデヴィルを誤解している、と批判する。そして、スミスの誤解は、一つに、スミスが『蜂の寓話』の第二巻を読んでいないからであるとも言う。ウェイトリーは、4ページにわたって、スミスの『道德感情論』の「放縦な諸体系」の章から引用して、スミスのマンデヴィル解釈が帰謬法を理解していない点を示そうとしている。一方、スミスは、あらゆる情念を、如何なる方向においても、まったく悪徳なものとしていることは、マンデヴィル博士の著書の大きな誤謬である<sup>(100)</sup>と述べている。スミスとウェイトリーのマンデヴィル解釈の相違は、次の点にある。スミスは、社会を形成する人間の諸側面を、すべてひとまとめにして、悪徳と称することに反対しているのに対して、ウェイトリーは、社会的正義と道德的美徳から一線を画した経済主体の利己性を悪徳と称するのは、仮説に過ぎず、経済主体と市場メカニズムの間の機能的な関係だけが問題であると考えているのである。ウェイトリーは、「その誤解は、著者自身（スミス）のものではなく、彼の対抗者達からの借物である」<sup>(101)</sup>と考えてしまっている。というのは、『国富論』の体系の中に、マンデヴィルの利己心の体系が組み込まれているので、スミスが道德問題を捨象した上で、利己心を原動力とする経済メカニズムを認識していると、ウェイトリーが考えたからであろう。事実、そうであると言えよう。しかしながら、二人のマンデヴィル解釈の相違は、富の学と交換の学の相違を反映しているのである。交換の学においては、経済主体の特性は、人間の諸側面から切り離され、蜂の巣のような閉じたシステムの原動力となっている。しかし、富の学においては、富の生産と分配の背後に、各個人の経済的な意味での自愛心が存在し、それは、多面的な人間の一側面ではあるが、富の性質およびそれに関する法則を支配する論理的な起点ではないのである。

スミスの『国富論』とその思想的背景に基づいて、マンデヴィルの受容に関して論じることは、本稿の範囲を越える課題である。しかし、極言するなら、スミスの『国富論』の基礎をなす自然法思想に吸収される形で、マンデヴィルの思想は受容されているに過ぎないのではなかろうか。ウェ

---

注 (98) Adam Smith, *The Theory of Moral Sentiments*, 1759. London: reprinted in 1982 Liverty Classics Edition, ed. by D.D. Raphael and A.L. Macfie pp. 306-314.

(99) 1729年に『蜂の寓話』の下巻が出版された。

(100) Adam Smith, *The Theory of Moral Sentiments*, 1759. London: reprinted in 1982 Liverty Classics Edition, ed. by D.D. Raphael and A.L. Macfie p.312. アダム・スミス『道德感情論』水田洋訳、筑摩書房、1985、p.392. Whately, "ILOPE" p.46.

(101) Whately, "ILOPE" p.44.

イトリーは、ペーリーの自然神学と自身の論理学を基礎としてマンデヴィルを解釈し、スミスの『国富論』体系に吸収されてしまったマンデヴィルを、再び摘出する形で、交換の学を提唱したのである。その際、富の学から交換の学への変移において、スミスの自然法思想は切り落とされてしまったと言ってもよいであろう。

近年、ハイエクの影響のもとに、カタラクティクス<sup>(102)</sup>（交換の学）という捉え方が注目されている。しかし、そもそもこのカタラクティクスという視点は、以上のような思想的連関のもとに、ウェイトリーによって提唱され、ジェヴォンズによって受け継がれているという学説史上の連関をあらためて見直すことも有益ではなかろうか。

（慶應義塾大学大学院経済学研究科修士課程）

---

注(102) F.A. Hayek, *Law Legislation and Liberty*, A new statement of the liberal principle of justice and political economy, The University of Chicago Press 1976, vol. 2, chapter 10, 'The Market Order or Catallaxy' ハイエクは、エコノミーという語の曖昧さがもたらした混乱を指摘し、市場秩序を構成する相互関連した経済システムを表現する言葉として、ウェイトリーの用いた「カタラクティクス」（交換の学）を用いることを提唱している。p. 108. ハイエク自身は、この用語がウェイトリーのものであることを特に言及していない。また、ハイエクの「真の個人主義」と「偽の個人主義」は、それぞれマンデヴィルの体系とペーリーの功利主義体系に対応させることができる。その場合、ハイエクの言う「カタラクシー」が、学史的にも真の個人主義に属するものであったことが、本稿の考察から確かめられよう。